母

芥川龍之介

一

部屋(へや)の隅に据えた姿見(すがたみ)には、西洋風に壁を塗った、しかも日本風の畳がある、――上海(シャンハイ)特有の旅館の二階が、一部分はっきり映(うつ)っている。まずつきあたりに空色の壁、それから真新しい何畳(なんじょう)かの畳(たたみ)、最後にこちらへ後(うしろ)を見せた、西洋髪(せいようがみ)の女が一人、――それが皆冷やかな光の中に、切ないほどはっきり映っている。女はそこにさっきから、縫物(ぬいもの)か何かしているらしい。

もっとも後は向いたと云う条、地味(じみ)な銘仙(めいせん)の羽織の肩には、崩(くず)れかかった前髪(まえがみ)のはずれに、蒼白い横顔が

少し見える。勿論肉の薄い耳に、ほんのり光が透(す)いたのも見える。やや長めな揉(も)み上(あ)げの毛が、かすかに耳の根をぼかしたのも見える。

この姿見のある部屋には、隣室の赤児の啼(な)き声のほかに、何一つ沈黙を破るものはない。未(いま)だに降り止まない雨の音さえ、ここでは一層その沈黙に、単調な気もちを添えるだけである。

「あなた。」

そう云う何分(なんぷん)かが過ぎ去った後(のち)、女は仕事を続けながら、突然、しかし覚束(おぼつか)なさそうに、こう誰かへ声をかけた。

誰か、——部屋の中には女のほかにも、丹前(たんぜん)を羽織(はお)った男が一人、ずっと離れた畳の上に、英字新聞をひろげたまま、長々(ながなが)と腹這(はらば)いになっている。が、その声が聞えないのか、男は手近の灰皿へ、巻煙草(まきたばこ)の灰を落したきり、新聞から眼さえ挙げようとしない。

「あなた。」

女はもう一度声をかけた。その癖女自身の眼もじっと針の上に止まっている。「何だい。」

男は幾分うるさそうに、丸々(まるまる)と肥った、口髭(くちひげ)の短い、活動家らしい頭を擡(もた)げた。

「この部屋ね、——この部屋は変えちゃいけなくっ

て？」

「部屋を変える？　だってここへはやっと昨夜(ゆうべ)、引っ越して来たばかりじゃないか？」

　男の顔はけげんそうだった。

「引っ越して来たばかりでも。――前の部屋ならば明(あ)いているでしょう？」

　男はかれこれ二週間ばかり、彼等が窮屈な思いをして来た、日当りの悪い三階の部屋が一瞬間眼の前に見えるような気がした。――塗りの剝(は)げた窓側(まどがわ)の壁には、色の変った畳の上に更紗(さらさ)の窓掛けが垂れ下っている。その窓にはいつ水をやったか、花の乏しい天竺葵(ジェラニアム)が、

薄い埃（ほこり）をかぶっている。おまけに窓の外を見ると、始終ごみごみした横町（よこちょう）に、麦藁帽（むぎわらぼう）をかぶった支那（シナ）の車夫が、所在なさそうにうろついている。……

「だがお前はあの部屋にいるのは、嫌（いや）だ嫌だと云っていたじゃないか？」

「ええ。それでもここへ来て見たら、急にまたこの部屋が嫌（いや）になったんですもの。」

女は針の手をやめると、もの憂（う）そうに顔を挙げて見せた。眉（まゆ）の迫った、眼の切れの長い、感じの鋭そうな顔だちである。が、眼のまわりの暈（かさ）を見ても、何か苦労を堪（こら）えている事は、多少想像が出来ないでもない。

そう云えば病的な気がするくらい、米噛みにも静脈が浮き出している。

「ね、好いでしょう。……いけなくて？」

「しかし前の部屋よりは、広くもあるし居心も好いし、不足を云う理由はないんだから、――それとも何か嫌な事があるのかい？」

「何って事はないんですけれど。……」

女はちょいとためらったものの、それ以上立ち入っては答えなかった。が、もう一度念を押すように、同じ言葉を繰り返した。

「いけなくって、どうしても？」

今度は男が新聞の上へ煙草（たばこ）の煙を吹きかけたぎり、好（い）いとも悪いとも答えなかった。

部屋の中はまたひっそりになった。ただ外では不相変（あいかわらず）、休みのない雨の音がしている。

「春雨（はるさめ）やか、――」

男はしばらくたった後（のち）、ごろりと仰向（あおむ）きに寝転（ねころ）ぶと、独り言のようにこう云った。

「蕪湖（ウウフウ）住みをするようになったら、発句（ほっく）でも一つ始めるかな。」

女は何とも返事をせずに、縫物の手を動かしている。

「蕪湖（ウウフウ）もそんなに悪い所じゃないぜ。第一社宅は大き

いし、庭も相当に広いしするから、草花なぞ作るには持って来いだ。何でも元は雍家花園(ようかかえん)とか云ってね、——」

男は突然口を噤(つぐ)んだ。いつか森(しん)とした部屋の中には、かすかに人の泣くけはいがしている。

「おい。」

泣き声は急に聞えなくなった。と思うとすぐにまた、途切(とぎ)れ途切れに続き出した。

「おい。敏子(としこ)。」

半ば体を起した男は、畳に片肘靠(かたひじもた)せたまま、当惑(とうわく)らしい眼つきを見せた。

「お前は己（おれ）と約束したじゃないか？　もう愚痴（ぐち）はこぼすまい。もう涙は見せない事にしよう。もう、――」

　男はちょいと瞼（まぶた）を挙げた。

「それとも何かあの事以外に、悲しい事でもあるのかい？　たとえば日本へ帰りたいとか、支那でも田舎（いなか）へは行きたくないとか、――」

「いいえ。――いいえ。そんな事じゃなくってよ。」

　敏子は涙を落し落し、意外なほど烈（はげ）しい打消し方をした。

「私はあなたのいらっしゃる所なら、どこへでも行く気でいるんです。ですけれども、――」

敏子は伏眼（ふしめ）になったなり、溢（あふ）れて来る涙を抑（おさ）えようとするのか、じっと薄い下唇（したくちびる）を噛んだ。見れば蒼白い頬（ほお）の底にも、眼に見えない炎（ほのお）のような、切迫した何物かが燃え立っている。震（ふる）える肩、濡れた睫毛（まつげ）、——男はそれらを見守りながら、現在の気もちとは没交渉に、一瞬間妻の美しさを感じた。

「ですけれども、——この部屋は嫌（いや）なんですもの。」

「だからさ、だからさっきもそう云ったじゃないか？何故（なぜ）この部屋がそんなに嫌だか、それさえはっきり云ってくれれば、——」

男はここまで云いかけると、敏子の眼がじっと彼の

顔へ、注(そそ)がれているのに気がついた。その眼には涙の漂(ただよ)った底に、ほとんど敵意にも紛(まが)い兼ねない、悲しそうな光が閃(ひらめ)いている。何故この部屋が嫌になったか？——それは独り男自身の疑問だったばかりではない。同時にまた敏子が無言(むごん)の内に、男へ突きつけた反問である。男は敏子と眼を合せながら、二の句を次ぐのに躊躇(ちゅうちょ)した。

しかし言葉が途切(とぎ)れたのは、ほんの数秒の間(あいだ)である。男の顔には見る見る内に、了解の色が漲(みなぎ)って来た。

「あれか？」

男は感動を蔽(おお)うように、妙に素(そ)っ気(け)のない声を出し

た。

「あれは己も気になっていたんだ。」

敏子は男にこう云われると、ぽろぽろ膝の上へ涙を落した。

窓の外にはいつのまにか、日の暮が雨を煙らせている。その雨の音を撥（は）ねのけるように、空色の壁の向うでは、今もまた赤児（あかご）が泣き続けている。……

二

二階の出窓（でまど）には鮮（あざや）かに朝日の光が当っている。そ

の向うには三階建の赤煉瓦（あかれんが）にかすかな苔（こけ）の生えた、逆光線の家が聳えている。薄暗いこちらの廊下（ろうか）にいると、出窓はこの家を背景にした、大きい一枚の画（え）のように見える。巌乗（がんじょう）な樫（かし）の窓枠（まどわく）が、ちょうど額縁（がくぶち）を嵌（は）めたように見える。その画のまん中には一人の女が、こちらへ横顔を向けながら、小さな靴足袋（くつたび）を編んでいる。

女は敏子（としこ）よりも若いらしい。雨に洗われた朝日の光は、その肉附きの豊かな肩へ、――派手（はで）な大島の羽織の肩へ、はっきり大幅に流れている。それがやや俯向（うつむ）きになった、血色の好（い）い頬に反射している。心もち厚い唇の上の、かすかな生（う）ぶ毛（げ）にも反射している。

午前十時と十一時との間、――旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。商売に来たのも、見物に来たのも、泊(とま)り客は大抵(たいてい)外出してしまう。下宿している勤(つと)め人(にん)たちも勿論午後までは帰って来ない。その跡にはただ長い廊下に、時々上草履(うわぞうり)を響かせる、女中の足音だけが残っている。

　この時もそれが遠くから、だんだんこちらへ近づいて来ると、出窓に面した廊下には、四十格好(がっこう)の女中が一人、紅茶の道具を運びながら、影画(かげえ)のように通りかかった。女中は何とも云われなかったら、女のいる事も気がつかずに、そのまま通りすぎてしまったかも知

れない。が、女は女中の姿を見ると、心安そうに声をかけた。

「お清さん。」

女中はちょいと会釈してから、出窓の方へ歩み寄った。

「まあ、御精が出ますこと。――坊ちゃんはどうなさいました？」

「うちの若様？　若様は今お休み中。」

女は編針を休めたまま、子供のように微笑した。

「時にね、お清さん。」

「何でございます？　真面目そうに。」

女中も出窓の日の光に、前掛（まえかけ）だけくっきり照らさせながら、浅黒い眼もとに微笑を見せた。

「御隣の野村（のむら）さん、——野村さんでしょう、あの奥さんは？」

「ええ、野村敏子さん。」

「敏子さん？　じゃ私（わたし）と同じ名だわね。あの方はもう御立ちになったの？」

「いいえ、まだ五六日は御滞在（ごたいざい）でございましょう。それから何でも蕪湖（ウウフウ）とかへ、——」

「だってさっき前を通ったら、御隣にはどなたもいらっしゃらなかったわよ。」「ええ、昨晩（さくばん）急にまた、三

階へ御部屋が変りましたから、――」
「そう。」
女は何か考えるように、丸々（まるまる）した顔を傾けて見せた。
「あの方でしょう？　ここへ御出でになると、その日に御子さんをなくなしたのは？」
「ええ。御気の毒でございますわね。すぐに病院へも御入れになったんですけれど。」
「じゃ病院で御なくなりなすったの？　道理で何にも知らなかった。」
女は前髪（まえがみ）を割った額（ひたい）に、かすかな憂鬱の色を浮べた。が、すぐにまた元の通り、快活な微笑を取り戻すと、

悪戯（いたずら）そうな眼つきになった。
「もうそれで御用ずみ。どうかあちらへいらしって下さい。」
「まあ、随分でございますね。」
　女中は思わず笑い出した。
「そんな邪慳（じゃけん）な事をおっしゃると、蔦（つた）の家（や）から電話がかかって来ても、内証（ないしょ）で旦那様へ取次ぎますよ。」
「好（い）いわよ。早くいらっしゃいってば。紅茶がさめてしまうじゃないの？」
　女中が出窓にいなくなると、女はまた編物を取り上げながら、小声に歌をうたい出した。

午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。部屋毎（ごと）の花瓶に素枯（すが）れた花は、この間（あいだ）に女中が取り捨ててしまう。二階三階の真鍮（しんちゅう）の手すりも、この間に下男（ボオイ）が磨くらしい。そう云う沈黙が拡（ひろ）がった中に、ただ往来のざわめきだけが、硝子（ガラス）戸を開（あ）け放した諸方の窓から、日の光と一しょにはいって来る。

その内にふと女の膝（ひざ）から、毛糸の球（たま）が転げ落ちた。球はとんと弾（はず）むが早いか、一筋の赤を引きずりながら、ころころ廊下（ろうか）へ出ようとする、——と思うと誰か一人、ちょうどそこへ来かかったのが、静かにそれを拾い上

げた。

「どうも有難(ありがと)うございました。」

女は籐椅子(とういす)を離れながら、恥しそうに会釈(えしゃく)をした。見れば球を拾ったのは、今し方女中と噂をした、痩(や)せぎすな隣室の夫人である。

「いいえ。」

毛糸の球は細い指から、脂(あぶら)よりも白い括(くく)り指へ移った。

「ここは暖かでございますね。」

敏子は出窓へ歩み出ると、眩(まぶ)しそうにやや眼を細めた。

「ええ、こうやって居りましても、居睡(いねむ)りが出るくらいでございますわ。」

二人の母は佇(たたず)んだまま、幸福そうに微笑し合った。

「まあ、御可愛いたあたですこと。」

敏子の声はさりげなかった。が、女はその言葉に、思わずそっと眼を外(そ)らせた。

「二年ぶりに編針を持って見ましたの。――あんまり暇なもんですから。」

「私なぞはいくら暇でも、怠(なま)けてばかり居りますわ。」

女は籐椅子(とういす)へ編物を捨てると、仕方がなさそうに微笑した。敏子の言葉は無心の内に、もう一度女を打っ

たのである。

「お宅の坊ちゃんは、——坊ちゃんでございましたわね？　いつ御生れになりましたの？」

　敏子は髪へ手をやりながら、ちらりと女の顔を眺めた。昨日（きのう）は泣き声を聞いているのも堪えられない気がした隣室の赤児、——それが今では何物よりも、敏子の興味を動かすのである。しかもその興味を満足させれば、反って（かえって）苦しみを新たにするのも、はっきりわかってはいるのである。これは小さな動物が、コブラの前では動けないように、敏子の心もいつのまにか、苦しみそのものの催眠作用に捉（とら）われてしまった結果であろ

うか？　それともまた手傷（てきず）を負った兵士が、わざわざ傷口を開いてまでも、一時の快（かい）を貪（むさぼ）るように、いやが上にも苦しまねばやまない、病的な心理の一例であろうか？

「この御正月でございました。」

女はこう答えてから、ちょいとためらう気色（けしき）を見せた。しかしすぐ眼を挙げると、気の毒そうにつけ加えた。

「御宅ではとんだ事でございましたってねえ。」

敏子は沾（うる）んだ眼の中に、無理な微笑を漂わせた。

「ええ、肺炎（はいえん）になりましたものですから、——ほんと

うに夢のようでございました。」

「それも御出（おいで）て匆々（そうそう）にねえ。何と申し上げて好（よ）いかわかりませんわ。」

女の眼にはいつのまにか、かすかに涙が光っている。

「私なぞはそんな目にあったら、まあ、どうするでございましょう？」

「一時は随分（ずいぶん）悲しゅうございましたけれども、――もうあきらめてしまいましたわ。」

二人の母は佇（たたず）んだまま、寂しそうな朝日の光を眺めた。

「こちらは悪い風（かぜ）が流行（はや）りますの。」

女は考え深そうに、途切（とぎ）れていた話を続け出した。
「内地はよろしゅうございますわね。気候もこちらほど不順ではなし、――」
「参りたてでよくはわかりませんけれども、大へん雨の多い所でございますね。」
「今年は余計――あら、泣いて居りますわ。」
女は耳を傾けたまま、別人のような微笑を浮べた。
「ちょいと御免下さいまし。」
しかしその言葉が終らない内に、もうそこへはさっきの女中が、ばたばた上草履（うわぞうり）を鳴らせながら、泣き立てる赤児（あかご）を抱（だ）きそやして来た。赤児を、――美しいメ

リンスの着物の中に、しかめた顔ばかり出した赤児を、——敏子が内心見まいとしていた、丈夫そうに頤（あご）の括（くく）れた赤児を！

「私が窓を拭（ふ）きに参りますとね、すぐにもう眼を御覚ましなすって。」

「どうも憚（はばか）り様。」

女はまだ慣（な）れなそうに、そっと赤児を胸に取った。

「まあ、御可愛い。」

敏子は顔を寄せながら、鋭い乳の臭いを感じた。

「おお、おお、よく肥（ふと）っていらっしゃる。」

やや上気（じょうき）した女の顔には、絶え間ない微笑が満ち

渡った。女は敏子の心もちに、同情が出来ない訳ではない。しかし、――しかしその乳房（ちぶさ）の下から、――張り切った母の乳房の下から、汪然（おうぜん）と湧いて来る得意の情は、どうする事も出来なかったのである。

三

雍家花園（ようかかえん）の槐（えんじゅ）や柳は、午（ひる）過ぎの微風に戦（そよ）ぎながら、庭や草や土の上へ、日の光と影とをふり撒（ま）いている。いや、草や土ばかりではない。その槐（えんじゅ）に張り渡した、この庭には似合（にあ）わない、水色のハムモックにもふり撒（ま）

いている。ハムモックの中に仰向けになった、夏のズボンに胴衣しかつけない、小肥りの男にもふり撒いている。

男は葉巻に火をつけたまま、槐の枝に吊り下げた、支那風の鳥籠を眺めている。鳥は文鳥か何からしい。これも明暗の斑点の中に、止り木をあちこち伝わっては、時々さも不思議そうに籠の下の男を眺めている。男はその度にほほ笑みながら、葉巻を口へ運ぶ事もある。あるいはまた人と話すように、「こら」とか「どうした？」とか云う事もある。

あたりは庭木の戦ぎの中に、かすかな草の香を蒸ら

せている。一度ずっと遠い空に汽船の笛(ふえ)の響いたぎり、今はもう人音(ひとおと)も何もしない。あの汽船はとうに去ったであろう。赤濁(あかにご)りに濁った長江(ちょうこう)の水に、眩(まばゆ)い水脈(みお)を引いたなり、西か東かへ去ったであろう。その水の見える波止場(はとば)には、裸も同様な乞食(こじき)が一人、西瓜(すいか)の皮を噛(か)じっている。そこにはまた仔豚(こぶた)の群(むれ)も、長々(ながなが)と横たわった親豚の腹に、乳房(ちぶさ)を争っているかも知れない、——小鳥を見るのにも飽(あ)きた男は、そんな空想に浸(ひた)ったなり、いつかうとうと眠りそうになった。

「あなた。」

男は大きい眼を明いた。ハムモックの側に立ってい

るのは、上海（シャンハイ）の旅館にいた時より、やや血色の好（い）い敏子（としこ）である。髪にも、夏帯にも、中形（ちゅうがた）の湯帷子（ゆかた）にも、やはり明暗の斑点を浴びた、白粉（おしろい）をつけない敏子である。男は妻の顔を見たまま、無遠慮に大きい欠伸（あくび）をした。それからさも大儀（たいぎ）そうに、ハムモックの上へ体を起した。

「郵便よ、あなた。」

敏子は眼だけ笑いながら、何本か手紙を男へ渡した。と同時に湯帷子（ゆかた）の胸から、桃色の封筒（ふうとう）にはいっている、小さい手紙を抜いて見せた。

「今日は私にも来ているのよ。」

男はハムモックに腰かけたなり、もう短い葉巻を噛み噛み、無造作（むぞうさ）に手紙を読み始めた。敏子もそこへ佇（たたず）んだまま、封筒と同じ桃色の紙へ、じっと眼を落している。

雍家花園（ようかかえん）の槐（えんじゅ）や柳は、午過ぎの微風に戦（そよ）ぎながら、この平和な二人の上へ、日の光と影とをふり撒いている。文鳥（ぶんちょう）はほとんど囀（さえず）らない。何か唸（うな）る虫が一匹、男の肩へ舞い下りたが、直（すぐ）にそれも飛び去ってしまった。

……

こう云うしばらくの沈黙の後（のち）、敏子は伏せた眼も挙げずに、突然かすかな叫び声を出した。

「あら、お隣の赤さんも死んだんですって。」

「お隣？」

男はちょいと聞き耳を立てた。

「お隣とはどこだい？」

「お隣よ。ほら、あの上海（シャンハイ）の××館の、――」

「ああ、あの子供か？　そりゃ気の毒だな。」

「あんなに丈夫そうな赤さんがねえ。……」

「何だい、病気は？」

「やっぱり風邪（かぜ）ですって。始めは寝冷えぐらいの事と思い居り候ところ、――ですって。」

敏子はやや興奮したように、口早に手紙を読み続け

た。

「病院に入れ候時には、もはや手遅れと相成り、――ね、よく似ているでしょう？　注射を致すやら、酸素吸入（さんそきゅうにゅう）を致すやら、いろいろ手を尽し候えども、――それから何と読むのかしら？　泣き声だわ。泣き声も次第に細るばかり、その夜の十一時五分ほど前には、ついに息を引き取り候。その時の私の悲しさ、重々（じゅうじゅう）御察し下され度（たく）、……」

「気の毒だな。」

男はもう一度ハンモックに、ゆらりと仰向（あおむ）けになりながら、同じ言葉を繰返した。男の頭のどこかには、

未に瀕死の赤児が一人、小さい喘ぎを続けている。と思うとその喘ぎは、いつかまた泣き声に変ってしまう。雨の音の間を縫った、健康な赤児の泣き声に。――男はそう云う幻の中にも、妻の読む手紙に聴き入っていた。

「重々御察し下され度、それにつけてもいつぞや御許様に御眼にかかりし事など思い出され、あの頃はさぞかし御許様にも、――ああ、いや、いや。ほんとうに世の中はいやになってしまう。」

敏子は憂鬱な眼を挙げると、神経的に濃い眉をひそめた。が、一瞬の無言の後、鳥籠の文鳥を見るが早い

か、嬉しそうに華奢(きゃしゃ)な両手を拍った。
「ああ、好(い)い事を思いついた！　あの文鳥を放してやれば好いわ。」
「放してやる？　あのお前の大事の鳥をか？」
「ええ、ええ、大事の鳥でもかまわなくってよ。お隣の赤さんのお追善(ついぜん)ですもの。ほら、放鳥(ほうちょう)って云うでしょう。あの放鳥をして上げるんだわ。文鳥だってきっと喜んでよ。――私には手がとどかないかしら？　とどかなかったら、あなた取って頂戴(ちょうだい)。」

槐(えんじゅ)の根もとに走り寄った敏子は、空気草履(くうきぞうり)を爪立(つまだ)てながら、出来るだけ腕を伸ばして見た。しかし籠を

吊した枝には、容易に指さえとどこうとしない。文鳥は気でも違ったように、小さい翼（つばさ）をばたばたやる。その拍子（ひょうし）にまた餌壺（えつぼ）の黍（きび）も、鳥籠の外に散乱する。が、男は面白そうに、ただ敏子を眺めていた。反（そ）らせた喉（のど）、膨（ふくら）んだ胸、爪先（つまさき）に重みを支えた足、――そう云う妻の姿を眺めていた。

「取れないかしら？――取れないわ。」

敏子は足を爪立（つまだ）てたまま、くるりと夫の方へ向いた。

「取って頂戴よ。よう。」

「取れるものか？　踏み台でもすれば格別だが、――何もまた放すにしても、今直（すぐ）には限らないじゃない

か？」

「だって今直に放したいんですもの、よう。取って頂戴よう。取って下さらなければいじめるわよ。よくって？　ハムモックを解いてしまうわよ。――」

　敏子は男を睨むようにした。が、眼にも唇にも、漲っているものは微笑である。しかもほとんど平静を失した、烈しい幸福の微笑である。男はこの時妻の微笑に、何か酷薄なものさえ感じた。日の光に煙った草木の奥に、いつも人間を見守っている、気味の悪い力に似たものさえ。

「莫迦な事をするなよ。――」

男は葉巻を投げ捨てながら、冗談のように妻を叱った。

「第一あの何とか云った、お隣の奥さんにもすまないじゃないか？　あっちじゃ子供が死んだと云うのに、こっちじゃ笑ったり騒いだり、……」

すると敏子はどうしたのか、突然蒼白い顔になった。その上拗ねた子供のように、睫毛の長い眼を伏せると、別に何と云う事もなしに、桃色の手紙を破り出した。男はちょいと苦い顔をした。が、気まずさを押しのけるためか、急にまた快活に話し続けた。

「だがまあ、こうしていられるのは、とにかく仕合せ

には違いないね。上海（シャンハイ）にいた時には弱ったからな。病院にいれば気ばかりあせるし、いなければまた心配するし、――」

男はふと口を噤（つぐ）んだ。敏子は足もとに眼をやったなり、影になった頬（ほお）の上に、いつか涙を光らせている。しかし男は当惑そうに、短い口髭（くちひげ）を引張ったきり、何ともその事は云わなかった。

「あなた。」

息苦しい沈黙の続いた後（のち）、こう云う声が聞えた時も、敏子はまだ夫の前に、色の悪い顔を背（そむ）けていた。

「何だい？」

「私は、――私は悪いんでしょうか！　あの赤さんのなくなったのが、――」

敏子は急に夫の顔へ、妙に熱のある眼を注いだ。

「なくなったのが嬉しいんです。御気の毒だとは思うんですけれども、――それでも私は嬉しいんです。嬉しくっては悪いんでしょうか？　悪いんでしょうか？　あなた。」

敏子の声には今までにない、荒々(あらあら)しい力がこもっている。男はワイシャツの肩や胴衣(チョッキ)に今は一ぱいにさし始めた、眩(まばゆ)い日の光を鍍金(めっき)しながら、何ともその問に答えなかった。何か人力に及ばないものが、厳然と前

へでも塞（ふさ）がったように。

（大正十年八月）

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８７（昭和62）年１月27日第１刷発行
　　１９９６（平成８）年７月15日第８刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：もりみつじゅんじ
１９９９年３月１日公開
２００４年３月７日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。